様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　５日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009　～　2012
課題番号：21520435
研究課題名（和文）　フィンランド語及びバルト海周辺諸言語の項構造の分析に基づく機能主義的モデルの構築
研究課題名（英文）　Construction of a functional model of language based on the analysis of the argument structure of the Finnish language and the Circum-Baltic languages
研究代表者
佐久間　淳一（SAKUMA JUN' ICHI）
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号：60260585

研究成果の概要（和文）：(1)使役や逆使役など、フィンランド語の項の増減を伴う統語現象について、バルト海周辺諸言語との対照という観点を導入することで、一般言語学的に、より説得力のある分析結果が得られた。また、その分析を通して、動詞項構造をめぐる言語理論の発展にも一定の貢献をした。(2)「動詞項構造研究会」を計８回開催したことにより、動詞項構造をめぐる諸問題を議論するための研究基盤を形成することができた。

研究成果の概要（英文）：(1)As to the promotion and the demotion of syntactic arguments of the Finnish language, a more persuasive analysis has been obtained by introducing an areal-linguistic perspective contrasting them with those of the Circum-Baltic languages. (2)A theoretical base for arguing about argument structures of verbal predicates has been established by organizing a series of seminars on this subject.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：言語学、フィンランド語、統語論、項構造、機能主義、地域言語学

１．研究開始当初の背景

(1)項構造研究の重要性

言語の情報伝達上の基本単位である文は、動詞などの述語を核として、述語とその述語が要求する項によって組み立てられている。このとき、述語と項の関係を項構造と言うが、Levin & Rappaport Hovav(2005)が示すように、項構造の統語的な実現過程は統語論研究の主要テーマの一つであり、未解決の問題も少なくない[1)]。

研究代表者は、長年にわたり、フィンランド語の主語・目的語等の中核的な項がどのような形態格で標示されるかを研究してきた。その結果、フィンランド語の中核的な項の格表示は、文法機能と形態格の一対一対応では説明できず、意味役割や Role and Reference Grammar で言う Semantic Macrorole を考慮に入れることによってはじめて、適切に説明できることがわかった。また、この一連の研究から、項構造の統語的な実現過程を説明するには、意味役割や定性、情報構造など、種々の要因を考慮する必要があり、さまざまな理論的枠組みで提案されている項構造の統語的な実現過程

に関する説明モデルは修正の必要があると考えるに至った。

しかし、研究代表者によるこれまでの研究は主に中核的な項を対象にしており、使役や適用形のように、項の数が増加する統語現象によって導入される項など、周辺的な項についての分析は十分でなかった。他方、最近出版されたPylkkänen(2008)では、生成文法の立場から、フィンランド語をはじめとする諸言語について周辺的な項を含めた項構造が取り上げられている[2)]。

そこで、本研究では、周辺的な項も含めたフィンランド語の項構造について、特に項の増減を伴う統語現象に焦点を当て、その統語的な実現過程を包括的に解明するとともに、その結果に基づいて、項構造の統語的な実現過程に関する説明モデルを検討し、機能主義的な立場から、より妥当性の高い説明モデルの構築を目指すこととした。

1) Levin, B. & M. Rappaport Hovav, 2005. *Argument Realization*. Cambridge.
2) Pylkkänen, L., 2008 *Introducing Arguments*, The MIT Press.

(2)地域言語学の有用性

バルト海沿岸地域の諸言語については、近年、Dahl & Koptjevskaja-Tamm(2001)などに見られるように、地域言語学的な研究が盛んに行なわれている[3)]。個別言語の研究を基盤に一般的な言語モデルの構築を目指す場合、当該の言語がどれだけ言語の一般的な類型に近いかどうかの見極めが問題になる。当該の言語を相対化する一つの方法は、地域も系統も異なる諸言語と対照することであるが、このような言語類型論的手法では、往々にして細かな言語事実が捨象されてしまう。他方、地域言語学的な手法を用いれば、問題となっている統語事象が地域内の言語に共有されている場合が多いため、各言語の言語事実を細部にわたって対照しながら、当該言語を相対化することが可能になる。実際、項構造に関しては、フィンランド語やエストニア語の場所格が、リトアニア語やラトビア語に借用されていることが知られている。

この地域で地域言語学的な研究を行なう場合、バルト語についての専門的知識が不可欠で、国内でそれを提供できる研究者はごく少ないが、研究代表者は、日本で数少ないバルト語研究者である櫻井映子(研究協力者)と長年にわたって研究上の交流がある。

そこで、本研究では、櫻井映子の協力を得て、フィンランド語における項構造の統語的な実現過程を、地域言語学的な手法により、地域内の諸言語、特にバルト語と対照し、その結果を、項構造の統語的実現過程に関する一般的な説明モデルの構築に反映させることを目指すこととした。

3) Dahl, Ö. & M. Koptjevskaja-Tamm(eds.). 2001. The Circum-Baltic Languages: Typology and Contact. John Benjamins.

２．研究の目的

本研究は、次の三点において、理論面の貢献をなすことを目的として行った。

(1) 研究代表者のこれまでの研究を基盤に、周辺的な項も含めたフィンランド語の項構造(argument structure)を包括的に記述し、特に、項の増減を伴う統語現象に着目して、フィンランド語の項構造の統語的な実現過程(syntactic realization)を解明する。

(2) 上記(1)の結果に基づき、機能主義的な立場から、項構造の統語的な実現過程に関する一般的な説明モデルを提案する。

(3) 従来比較的手薄であったエストニア語、リトアニア語、ラトビア語の項構造およびその統語的な実現過程について、包括的な記述と分析を行うとともに、それらの言語における項構造の統語的な実現過程を、地域言語学(areal linguistics)的観点から、フィンランド語と比較し、その結果を、上記(2)の説明モデルに反映することによって、より普遍的に妥当性の高い説明モデルの構築を目指す。

なお、説明モデルの精度を高めるためには、上記諸言語以外の言語の情報も有用であり、本研究では、定期的に研究会を開催することによって、さまざまな言語の研究者が意見交換できる場を用意し、項構造の統語的な実現過程についての知見を集積することも目的とした。

３．研究の方法

本研究は、上記の目的を達成するため、以下の５つの手段によって研究を行った。

(1)対象言語の項構造に関わる統語事象について、言語コーパスやアーカイブを利用して資料を収集した。

(2)フィンランド、エストニア、リトアニア、ラトビアの大学等の研究機関で調査活動を行うと共に、当該言語の研究者と意見交換を行った。

(3)定期的に研究会を開催し、研究代表者と研究協力者の間で研究成果を共有すると共に、さまざまな言語の研究者を招いて、情報や意見の交換を行った。

(4)上記(1)(2)によって収集した資料を詳細に分析し、(2)(3)によって得られた情報や意見を踏まえつつ、項構造の統語的な実現過程に関する一般的な説明モデルを構築した。

(5)研究成果を論文にまとめると共に、海外の学会で研究発表を行った。

４．研究成果

各年度の研究成果は、それぞれ以下のようにまとめられる。

平成 21 年度

(1) 8 月 27 日～29 日にかけてフィンランドのヘルシンキ大学で開催された、本研究の研究課題である「動詞項構造」と密接な関わりを持つ「格」をテーマにしたフィンランド言語学会主催のシンポジウムに参加し、The double nominative marking in the Finnish language と題した研究発表を行うとともに、他の参加者と意見交換を行った。

(2)さまざまな言語における動詞項構造について意見交換を行う場として「動詞項構造研究会」を発足させ、同研究会を二度にわたって開催した。一回目(12 月 20 日)の研究会では、研究代表者、佐々木冠(札幌学院大学教授)、長崎郁(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特任研究員)の三名が、二回目(3 月 8 日)の研究会では、中山俊秀(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授)、千葉庄寿(麗澤大学准教授)、大宮康一(名古屋大学博士課程後期課程)の三名が講演および研究報告を行い、他の出席者も交えて討論を行った。

平成 22 年度

(1)8 月 9 日～14 日にかけてハンガリーのパーズマーニ・ペーテル大学(ピリシチャバ)で開催された第 11 回国際フィン・ウゴル学会議に参加し、Case Marking and Word Order in the Finnish language と題した研究発表を行うとともに、他の参加者と意見交換を行った。研究協力者の櫻井映子(東京外国語大学非常勤講師)と共に、9 月 2 日～5 日にかけてリトアニアのビリニュス大学で開催された第 43 回欧州言語学会に参加し、参加者と意見交換を行った。

(2)「動詞項構造研究会」を二度にわたって開催し、一回目(9 月 19 日)の研究会では、研究協力者である櫻井映子の他、江畑冬生(日本学術振興会特別研究員)、鈴木建次郎(愛知教育大学非常勤講師)の三名が、二回目(3 月 13 日)の研究会では、沈 力(同志社大学教授)、入江浩司(金沢大学准教授)、白明学(名古屋大学助教)の三名が講演および研究報告を行い、他の出席者も交えて討論を行った。

平成 23 年度

(1)「動詞項構造研究会」を二度にわたって開催し、一回目(10 月 8 日)の研究会では、塩原朝子(東京外国語大学アジア･アフリカ言語文化研究所准教授)、小野智香子(千葉大学大学院人文社会科学研究科特任研究員)、児島康宏(東京外国語大学アジア･アフリカ言語文化研究所特別研究員)の三名が、二回目(3 月 2 日)の研究会では、本研究の研究協力者である櫻井映子(東京外国語大学非常勤講師)の他、加藤昌彦(大阪大学外国語学部准教授)、月田尚美(愛知県立大学外国語学部教授)の三名が講演および研究報告を行い、他の出席者も交えて討論を行った。

(2)24 年度秋に開催予定の日本言語学会において、動詞項構造に関するワークショップを開催するため、研究協力者の櫻井映子および入江浩司・金沢大学人間社会環境研究科准教授両名と数度にわたり研究打ち合わせを行った。

平成 24 年度

(11)11 月 24, 25 日の両日、九州大学で開催された日本言語学会第145回大会において、研究協力者の櫻井映子・東京外国語大学非常勤講師、および入江浩司・金沢大学人間社会環境研究科准教授と共に、ワークショップ『北ヨーロッパおよびバルト海周辺地域の諸言語における逆使役について』を企画し、フィンランド語、リトアニア語、アイスランド語の逆使役構文を例に、項の減少をもたらす統語的な過程である逆使役、再帰および受動の相互の関係について、研究発表を行うとともに、他の参加者と意見交換を行った。

(2)4 月 18 日～20 日にかけて、ドイツ・フライブルク大学で開催された第11回国際北欧語一般言語学会に参加し、斜格要素の昇格について、Objecthood of Elative Arguments of the Finnish Language と題する研究発表を行うとともに、他の参加者と意見交換を行った。

(3)「動詞項構造研究会」を二度にわたって開催し、一回目(11 月 3 日)の研究会では、と呉人惠(富山大学教授)、北野浩章(愛知教育大学准教授)、ラトナーヤカ・ディルルクシ(名古屋大学博士課程後期課程)の三名が、二回目(3 月 9 日)の研究会では、米田信子(大阪大学教授)、品川大輔(香川大学准教授)、當野能之(関西看護医療大学講師)、森本雪子(フンボルト大学研究員)、阿部優子(JICA 青年海外協力隊 語学訓練スーパーバイザー)の五名が講演及び研究報告を行

い、他の出席者も交えて討論を行った。

これらの各年度の研究成果から、本研究を通じて得られた研究成果は、以下のようにまとめられる。
(1)使役や逆使役など、フィンランド語の項の増減を伴う統語現象について、バルト海周辺諸言語との対照という観点を導入することで、一般言語学的に、より説得力のある分析結果が得られた。また、その分析を通して、動詞項構造をめぐる言語理論の発展にも一定の貢献をした。
(2)「動詞項構造研究会」を計８回開催したことにより、動詞項構造をめぐる諸問題を議論するための研究基盤を形成することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①SAKUMA Jun’ichi. *Reflexive Verbs and Anti-causativity in the Finnish Language*, Nagoya University Journal of the School of Letters, vol.9, 21-32. 2013.査読有.

② SAKUMA Jun’ichi. *Objecthood of the Elative Argument of the Finnish Language*, Nagoya University Journal of the School of Letters, vol.8, 33-44. 2012. 査読有.

③ SAKUMA Jun’ichi. *“Deficient” Case Marking System of the Finnish Language*, Nagoya University Journal of the School of Letters, vol.7, 33-44. 2011. 査読有.

④ SAKUMA Jun’ichi. *The Causative Constructions in the Finnish Language*, Nagoya University Journal of the School of Letters, vol.6, 17-28. 2010. 査読有.

〔学会発表〕（計５件）
①SAKUMA Jun’ichi. *Reflexive Verbs and Anticausatives in the Finnish Language from a Typological Point of View*, 46th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea. 2013 年 9 月 18 日～21 日(発表確定), スプリット大学(クロアチア).

②佐久間淳一、入江浩司、櫻井映子. 北ヨーロッパおよびバルト海周辺地域の諸言語における逆使役について, 日本言語学会第 145 回大会. 2012 年 11 月 25 日, 九州大学.

③SAKUMA Jun’ichi. *Objecthood of Elative Arguments of the Finnish Language*, 11th International Congress of Nordic and General Linguistics. 2012 年 4 月 20 日, フライブルク大学(ドイツ).

④SAKUMA Jun’ichi. *Case Marking and Word Order in the Finnish language*, The 11th International Congress for Finno-Ugric Studies. 2010 年 8 月 12 日, パーズマーニ・ペーテル大学(ハンガリー).

⑤SAKUMA Jun’ichi. *The double nominative marking in the Finnish language*, Symposium ’Case in and across languages’, The Linguistic Association of Finland. 2009 年 8 月 27 日, ヘルシンキ大学(フィンランド).

６．研究組織
(1)研究代表者
佐久間　淳一（SAKUMA JUN’ICHI）
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：60260585

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし